様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １６ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０００２

研究課題名（和文）ベルクソンを中心とした、１９００年前後のフランスにおける「笑い」の哲学の研究

研究課題名（英文）Bergson's Theory of Laughter

研究代表者
村山　達也（Murayama, Tatsuya）

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：５０５９６１６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,600,000円、（間接経費）　780,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「笑い」論を出発点に、ベルクソンの定義論と情動論を検討した。それぞれの主要な成果を一点ずつ挙げる。
1. 彼の笑い論の独自性の一つに（定義ではなく）親縁性で繋がりあう諸変奏の主題の把握を目指すという方法がある。これはある種の社会論の試みと捉えることができ、その視点からは、知性／直観の二元論をはみ出す認識論を彼が構築していたことが分かる。
2. 彼は情動にある種の認識的役割を認めており、その十全な活用は、笑い論に加えて『道徳と宗教の二源泉』での神の存在証明に見て取ることができる。それはいわば「哲学者の神」が「アブラハム、イサク、ヤコブの神」でもあることを示す「間接的な存在証明」である。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research was to examine Bergson's theory of laughter with a special focus on his theories of definition and of emotion. The research concluded as follows:
1. The originality of his method in elucidating the nature of funniness consists in the fact that he tries to grasp, not the definition but the "theme" of things that are funny. This method is an attempt at sociology, and from this point of view, this method can be taken as a sketch of "third kind of knowledge" in bergsonism.
2. Bergson admits certain epistemic role of emotion. This subject is developed not only in his theory of laughter but also in his proof of existence of God which demonstrates, so to speak, the identity of "God of Abraham, God of Isaac, God of Jacob" with "God of the philosophers".

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：ベルクソン　笑い　定義　情動　感情

1. 研究開始当初の背景

(1) 申請者自身の学術的背景

本研究を開始する以前、申請者は、ベルクソンの最初の著作『意識の直接与件についての試論』を中心的なテキストとして、彼の自由論を主に研究してきた。その成果は博士論文としてまとめられたが、自由論と密接に関係しつつも自由論研究の過程で十分に考察することのできなかった問題として、「自由は定義できない」という主張に要約することのできる彼の定義論、「表層の自我」という概念によって示唆されている彼の社会論、そして「自由な自発性についての直接的感情」という概念の背景にある彼の情動論という三つの領域に関わるいくつかの問題が残された。これらは、それぞれに重要ではあるものの、自由論にそれとして一貫性を与えるためには、二次的な話題としていったん脇にのけておかざるをえなかったのである。

そして、自由論はひととおりまとめることができたため、あらためてこれらの問題に取り組み、ベルクソンの自由論に側面からの解明を与えると同時に、これらの問題の観点からベルクソン哲学を解釈することを次の研究課題とした。そこで出発点として取り上げたのが、彼の第三の著作『笑い』における笑い論である。その理由として、一つには、この著作が彼の自由論の応用ないし発展であるという側面をもつこと、もう一つには、この著作における議論は、定義論・社会論・情動論を密接に絡みあわせたかたちで展開されており、上記の課題を遂行する際の研究対象としては最適であると思われたことを挙げることができる。

(2) 広い学術的背景

ベルクソン研究においては、一九九〇年代以降、新資料の公刊や校訂版の出版などが相次いでいる。そして、そうした流れを踏まえつつ、近年では、ジャンケレヴィッチやグイエ、ドゥルーズといった古典的解釈を大きく乗り越える新しい解釈を提示しようという動向も生まれつつある。ただしその中でも、『笑い』は（彼の主要著作とはみなされていないためか）ほとんど研究がなされていないのが現状である。また、彼の定義論と情動論についても研究は手薄であり、社会論についても、同時代のデュルケームとの比較などは一定の蓄積があるものの、ベルクソンの理論それ自体を内在的に研究し、その議論の構造を明らかにしようとするものは数少ない。こうして、研究の欠を補うという意味でも、本研究には大きな価値があると思われた。

また、定義論や情動（感情）論は、現代の哲学においても大きなトピックをなしている。過去の哲学者の思想について、たんなる過去の遺物として扱うのではなく、その思想を支える議論を再構成することで哲学としての意義を解明することは、哲学史研究の一つの主要な目的であるが、その際に現代の哲学で開発された議論や概念を用いることは（もちろん、もとの思想を時代錯誤的に歪めてしまう危険がないわけではないが）一定の効果をもっている。こうして、現代の豊富な議論・概念を解釈の補助として用いることができるし、また、うまく用いられないとしても、その場合には、うまく用いられないというそのことによって逆にベルクソンの独自性を明らかにすることができる、という意味でも、いま彼の定義論や情動論を研究することには意義があると思われた。

2. 研究の目的

以上の背景から、本研究の目的は次のように定められた。

(1)『笑い』を中心として、ベルクソンの定義論の具体的な内実を明らかにすること。ならびに、その定義論を背景で支えている存在論と認識論についても、可能な限り明らかにすること。

後半について簡単に説明しておこう。定義論は、定義される対象がそもそもどのようなあり方をしているのかをめぐる主張、ならびに、正確な定義に至るための方法と、その定義が正確であることを判定するための規準についての主張を、まさに議論されるべきこととしてではなくとも、少なくとも議論の前提としては含まざるをえない。それゆえ、定義論の解明は、必然的に、存在論と認識論の解明をある程度は含まざるをえないのである。

(2)『笑い』から出発しつつ、ベルクソンの情動論の具体的な内実を、とりわけ「情動の認識的役割」という観点から明らかにすること。

笑いを引き起こす「可笑しい」という感情は、笑われている対象が「可笑しさ」という性質をもっているとみなすところに成り立つ。その意味では、「可笑しい」という感情は何らかの認識的役割を果たしているわけだが、しかし、それがたんなる主観的な印象にすぎないのか、対象の客観的性質を捉えてのことなのかについては、なお議論の余地がある。この問いの解明を本研究は試みるのだが、とはいえ『笑い』だけをテキストとしてこの問いを考察するのは困難に思われた。そのため、この目的については、ベルクソン哲学の全体を視野に収めて考察することにした。「『笑い』から出発しつつ」とした所以である。

(3) 以上二つの目的に関する成果を踏まえつつ、ベルクソンの社会論の具体的な内実を明らかにすること。ただし、本研究では、上記二つの目的を主要なものとし、この第三の目的については、あくまでそれらと関係する

範囲、ないしそれらに関する成果から考察できる範囲で検討することにした。

3. 研究の方法

研究方法としては、従来は比較されることのほとんどなかった哲学者との比較、ならびに、同時代の笑い論との比較を重視した。

(1) 定義論については、ヴィトゲンシュタインとの比較を行なった。とりわけ注目したのが、ヴィトゲンシュタインが『哲学探究』で提示した、「家族的類似」という概念である。この比較からは、両者の議論がさまざまな特徴を共有していることが明らかになった。すなわち、定義すること一般に対する警戒心、具体的事実への注目、「親縁性」という概念の重視、道徳ないし美学に関わる概念の定義の難しさへの注目、概念（ないし語）がもつ社会的・歴史的背景と定義の難しさとの繋がりについての指摘などである。ベルクソンとヴィトゲンシュタインとの比較研究は、一九七〇年前後のパリアントによる二つの研究の他にはほぼ存在しない。しかし申請者は、この比較を通じて、たんに類似点を指摘するだけではなく、ベルクソンの独自性を具体的に指摘することができた（上記の類似点についても、一見した類似の背後にある差異を指摘することができた）。とりわけ有意義な比較であったと言える。

(2) 情動論については、ハイデガーとの比較を行ない、考察を進める糸口の一つとして用いた。ハイデガーが『存在と時間』において「道具的存在」や「情態性」といった概念をつうじて試みたことの一つに、多様な認識源泉を指摘することで認識を複数化ないし多層化するというものがある。本研究では、同様のことをベルクソンも行っているのではないかという視点のもと、ベルクソンにおける情動の認識的役割についての研究を行なった。たしかに生産的な、かつ、これまでになされたことのない比較ではあったものの、こちらについては、さらに踏み込んでハイデガーとの類似性や差異をより詳細に指摘するまでには至らなかった。「考察を進める糸口の一つ」とした所以である。

(3) 事前に行なった調査によって、ベルクソンが『笑い』を書いた当時、すなわち一九〇〇年前後においては、さまざまな論者が、さまざまな立場から笑いを論じていたことが分かっていた。そこで、まず第一に、一九〇〇年前後に書かれた、笑いについての雑誌論文や書籍を分析して、笑いをめぐる当時の学問的状況を解明すること、次に、そのようにして明らかになった、当時に固有の問題設定や論争の背景を踏まえつつ、その中でのベルクソンの独自性を明らかにすることを試みた。この研究方法については、具体的な成果は次項で述べる。

4. 研究成果

以下、まずは定義論、情動論、笑い論のそれぞれについて、主な研究成果に絞って要点を述べ、次に、今後の研究の展望として、十分に明らかにできなかった点、ならびに、あらたに浮上してきた検討すべき課題について述べる。

(1) ベルクソンの笑い論の独自性の一つとして、定義ではなく、親縁性によって繋がりあうさまざまな変奏の主題の把握を目指すという方法がある。彼がこうした方法を構想した背景として、一つには、彼の生命論（固定的な定義をあくまで逃れるような仕方で生物が創造的に変化・進化する原動力としての生命、という考え方）がある。だがそれだけではない。もう一つ、そうした生命の一つの発露としての人間社会においては、「笑いを生み出す想像力」それ自体が、必ずしも創造的とは言えない仕方で独自に発展する、という社会論も、この定義論の背景にあるのである。こうして、彼の定義論は、ある種の社会論の試み、より正確に言えば、社会的事象を把握するための方法論の試みとして捉えることができる。さらに、その視点からは、「知性と直観の二元論」という従来のベルクソン解釈の枠組みでは十分に捉えることのできない認識論を彼が構築していたことが分かるのである。

(2) ベルクソンは、情動に一定の認識的役割を認めており、その十全な活用は笑い論に加えて『道徳と宗教の二源泉』での神の存在証明に見て取ることができる。そこでは、情動についての神秘家の証言は、神の存在についての単なる資料ではなく、より積極的な情報源として用いられており、その証言を用いてベルクソンがしている神の存在証明は「間接的存在証明」ないし「本性の開示による存在証明」とでも呼ぶべき、哲学史上でもきわめて独自なものである。それはいわば、『創造的進化』で明らかになった「哲学者の神」が「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」でもあることを示すという道筋を辿ってなされる存在証明なのである。

また、情動の認識的役割についてのこうしたベルクソンの扱いは、「実在するあらゆる対象は経験可能である」という方針のもとに遂行される、彼独自の経験論（たんに「経験だけが認識源泉だ」という認識論的主張にとどまらず、「存在するものはすべて、何らかの意味で経験可能だ」という存在論的主張をも含んだ経験論）に由来している。そしてこの経験論は、おそらく、最初の著作『意識の直接与件についての試論』や『笑い』をも含めた彼の全哲学の中で、一貫して用いられているのである。

(3) ベルクソンの『笑い』と同時代の一九〇〇年前後の笑い論を検討することで明らかになったのは、『笑い』を論じる上で一般的であったいくつかの視点を再検討、ないし相対化する必要性である。たとえば、笑いを社会や道徳との関係のもとに論じ、「懲罰」と特徴づけること、モリエールを中心とした古典喜劇論であること、「可笑しさ」の定義の難しさを強調することといった、ベルクソンの笑い論の重要な特徴と考えられてきたことは、実際には多くの論者に共有されていた特徴であった。それゆえ、こうした論点だけでは（あるいは、こうした論点について、より詳細な検討を行なうことなしには）、ベルクソンの笑い論だけがもつ特徴を取り出すことはできないのである。

それゆえ、ベルクソンの笑い論の独自性を解明するためには、そこでの基礎概念である定義、情動、経験といった概念の解明が必要である。それらについての成果は上に述べた通りである。

(4) 十分に明らかにできなかった点、ならびに、あらたに浮上してきた検討すべき課題は以下のとおりである。

① 定義論のところで指摘した「知性と直観の二元論をはみ出す認識方法」は、申請者の現在の見通しでは、おそらく、ベルクソンの最後の主著『道徳と宗教の二源泉』の第一章と第二章において、道徳と宗教それぞれを題材にさらに展開されている（とりわけ、第二章の宗教論が扱う「創話機能」は、ある種の想像力でもあるため、「喜劇的想像力」を扱う笑い論との関連は深いと思われる）。ただし、この問題については、本研究との関連が浅いため、今後の研究課題とした。

② 情動論研究の一環として神の存在証明を検討したとき、ベルクソン哲学における「世界に対する神の内在／超越」という、ベルクソン研究の伝統的主題が、やはり浮上してこざるをえなかった。この主題についても（とりわけベルクソンの経験論との関連ににおいて）一定の見通しを得ることはできたものの、本研究との関連は浅いため、今後の研究課題とした。

③ 一九〇〇年前後の笑い論については、ベルクソンとの関連でさまざまなことを明らかにすることはできたものの、扱うべき文献の広がりや、主題自体がもつ（哲学、倫理学、社会学、心理学、美学などの多分野にまたがる）複雑さゆえ、全体像を十分に解明するまでには至らなかった。これについても今後の研究課題としたいが、ひとまずベルクソンについて「笑い」をめぐる基礎概念や方法論を明らかにできた点で、今後のさらなる研究の足場を整えることはできたと言える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① Tatsya MURAYAMA, « L'émotion comme connaissance ? La preuve bergsonienne de l'existence de Dieu », 『思索』, 査読なし, 第 46 巻, 2013, pp. 1-28.

②村山達也「儚さと空しさと満たされなさと」, 『東北哲学会年報』, 査読有, 第 28 巻, 2012, pp. 1-13.

〔学会発表〕（計 2 件）

① Tatsuya MURAYAMA, « L'émotion comme connaissance ? », Bergson et la philosophie française du XIX siècle (5e colloque international du PBJ), 2012 年 10 月 19 日, 京都大学.

② 村山達也「儚さと空しさと満たされなさと」, 東北哲学会, 2011 年 10 月 22 日, 弘前大学.

〔図書〕（計 1 件）

① Frédéric WORMS, Tatsuya MURAYAMA et al, PUF, *Annales bergsoniennes V*, 2012, pp. 379-400.

６．研究組織

(1) 研究代表者

村山　達也（MURAYAMA, TATSUYA）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50596161

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし